



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業

～ 鯖と一緒にサバイバル！～

今回ご紹介する企業は、「関サバ」と並ぶ「八戸松前沖サバ」を使った鯖寿司の専門店を展開している「株式会社鯖や」です。鯖に魅せられ、「サバ博士」を自称する社長の右田孝宣氏。法人の宅配専門店から始まったこの会社が、僅か数年で大手百貨店に売場を持つまでに至った、その成長の軌跡とは。

社長の鯖にかける熱きその想いに迫ります。

企業情報

名称	株式会社 鯖や
所在地	豊中市庄内東町1丁目7番33号
設立	平成19年6月1日
代表者	右田 孝宣
従業員	43名 資本金 100万円
H P	http://www.torosaba.com/

●起業までの経緯を教えてください。

高校を卒業後、水産系の会社で働いている友人に誘われて、スーパーの鮮魚部門で働き始めました。今でこそ、魚を触るのも、あの独特のにおいも平気になりましたが、実は、幼いころから魚が全くダメだったんです（笑）。だから、この就職の話があった時、非常に迷いました。最終的には、友人の顔を立てて、就職を決めたというところです。

最初は嫌だった仕事でしたが、魚のさばき方などを覚えてくると、だんだん面白くなり、もう少し大きいところで働きたいと思い、別のスーパーに転職したりもしました。



【「サバ博士」右田社長】

●その後、海外で修業されたそうですね。

「これまでの魚に関する技術を海外で活かしたい」と思うようになり、ワーキングホリデーを利用して、単身、オーストラリアに乗り込みました。当時は、海外で仕事をするのが格好良いと思っていたというのもありました。現地では、チェーン店の回転寿司屋に飛び込みました。その会社は、たまたま日本人が経営していて、英語があまり得意でない私で



【右田社長が「究極の理解者」とおっしゃる奥様】

もすんなりと採用していただくことができました。その後、現地での日本食ブームもあって、その回転寿司屋はどんどん店舗網を拡大し、あれよ、あれよと言う間に、私もその会社のNo2まで上り詰めていました。社長からは、新しく立ち上げる会社の社長への就任も打診されたのですが、それを断り、私の個人

的な事情で日本に帰国することになったのです。

帰国後、居酒屋を経営したのですが、そこで出していた鯖寿司が人気を博し、妻の提案で宅配バイクの屋根に鯖の模型を備え付けた「サバイク」に乗り、鯖寿司の宅配を始めました。この様子が、地元紙、お昼のバラエティ番組などに取り上げられ、一気にメディアに露出する機会が増え、鯖が自分に与えてくれる「可能性」を追い求めていきたいと感じるようになっていったのです。そんな思いから鯖寿司専門の会社を起業することにしたのです。



【株式会社鯖やの鯖寿司】

べられる鯖寿司を作れば、絶対にお客様に喜んでもらえる。当初は、そういった単純な発想だったと思います。

その後も、研究に研究を重ね、オーストラリアでも仕事の傍ら研究を続けていました。食材にも一切の妥協をせず、行き着いたのが、青森の「八戸松前沖サバ」でした。

こうして、自分自身でも納得いくものが出来たので、居酒屋で提供したところ、人気メニューとなったのです。

●なぜ、鯖寿司だったのですか。

私は、幼いころから魚料理の臭みがどうも駄目で、特に青魚が大嫌いでした。ですが、魚関係の仕事に就くようになって、毎日、毎日、魚と向き合っていると、不思議と魚の魅力に引き込まれていくのを感じるようになりました。中でも、特に臭みが強いと感じていた鯖をどうにか美味しく食べる方法はないかと考え始め、以後、鯖の種類から酢の調合割合まで、鯖に関することなら何でも研究をしました。そのうちに、美味しい鯖寿司を作ろうと思うようになったんです。自分でも美味しく食

●起業後に苦労した点は。

起業はしたものの、現実には厳しく、営業をしてもなかなか売れない日々が続きました。販売する場所すらなく、中央市場などにも営業攻勢を掛けましたが、なかなか理解してもらえません。創業まもなく倒産の危機です。そんなある日、あるスーパーが販売することを許可してくれ、折り込みチラシにお昼のバラエティ番組の出演者が美味しそうに鯖寿司を頬張る様子を挿入したところ、当日、大行列になったのです。一向に途切れない行列を目の当たりにし、感動で涙が溢れそうになりました。「何とかやっていけそうだな」と思った瞬間でもあります。

●広報戦略に力を入れたそうですが。

折り込みチラシでの成功体験もあって、広報戦略に力を入れていきました。鯖の模型付のバイク「サバイク」、テーマソングである「さばばばーん♪」を自主制作するなど、派手なPRが功を奏し、徐々に売上げが伸びていきました。お客様はこうしたパフォーマンスを物珍しく思い、少し値が張っても、無理して購入してくれたのだと思っています。それゆえ、リピート率は大変低いものであり、同時に「ブランド化し、大手百貨店へ出店したい」という自分の夢が遠ざかっていくのを淋しく感じていました。



【「鯖やー！」の歌詞から始まるテーマソング『さばばばーん♪』】

●百貨店への出店はどうされたのですか。

ある日、条件付きで大手百貨店の方から出店のお誘いがありました。その条件とは、スーパーの既存店舗からすべて撤退することです。順調に売上げを伸ばしているスーパーからの撤退は、一時的に売上げがゼロになることを意味します。さらに、今後、百貨店での売上げが伸びなければ、再び倒産の危機に陥ることになるのです。非常に大きな賭けでしたが、自分の夢を優先し、百貨店への出店を決意したのです。

百貨店に出店したといっても、まだまだ仮出店であり、売上げが悪ければ撤退も余儀なくされる厳しいものです。そこでは、当社が得意としていたパフォーマンス戦略も通用せず、売上げは出店前と比べて、大きく減少しました。

そんな折、百貨店で「マグロ VS 鯖」という催事が企画され、当社は鯖派としてマグロとの対抗戦に臨む機会を得たのです。当社テーマソングの「さばばばーん♪」を武器に、双子の弟（現在販売部門担当）とラジオ出演する機会を得、鯖の販促活動を必死に行いました。奇しくも収録したラジオが、催事当日に放送されたこともあって、見事、鯖はマグロの売上げを上回り、百貨店側から「プロパーにならないか」とお誘いをもらうこととなったのです。



●今後の展開をどう考えていますか。

「鯖の専門商社」を目指しています。現在、国からの補助金を受けて、某大学と共同で、「とろさば」の研究を行っています。牛肉などには肉の品質に対する明確な基準が設けられていますが、魚にはそういった基準はありません。近海沖の鯖も八戸で漁獲されれば、八戸産となるように、産地の基準も曖昧です。「とろさば」という明確な基準を鯖の中に見出し、それを世に広めていきたいと考えています。

また、大阪市内で「サバー（鯖とバーをかけたもの）」というお店を本年中にオープンします。見たこともない鯖料理を提供して、お客様を驚かせたいと思っています。

【オープンする「サバー」】

●社長が思われる「苦難を乗り越える秘訣」とは。

これまでに倒産の危機は4度ほどありました。そういう時ほど、周囲から応援され、支えられていることを強く感じていました。

こうした経験から「企業は、周りから応援されるものにならないといけない」と強く感じており、それを考えることが、社長の仕事だと思っています。

企業経営は、様々な困難に出くわします。当社は、その場面、場面でミラクルが起きました。でも、それはミラクルではなかったと思っています。なぜならば、「必要とされていない企業は必ず消えますし、当社が必要とされている企業であればこそ、誰かが助けてくれたのだ」と考えるからです。

今後とも本当に必要とされる企業であり続けるため、努力していきたいと思っています。

●御社ではどのような CSR に取り組まれているのですか。

当社では、小学生等に対する食育事業や、起業家に向けた講演など様々な CSR に取り組んでいます。食育事業では、子供たちとその保護者と一緒に寿司づくり体験を行っています。冒頭にも説明したとおり、私はもともと魚が嫌いでした。同じように魚が嫌いな子供たちがたくさんいると思います。そんな子供たちにおいしいお寿司と一緒に作って、是非、好き嫌いをなくしてもらいたいと思っています。この食育事業は大変好評で、小学校の校長先生からオファーをいただくことも多いです。



【小学生に対する食育現場】

また、起業家や中小企業に向けた講演会では、それぞれの経営者等が今から立ち上げる（もしくは、立ち上げた）事業の未知なる可能性に胸をふくらませていただきたいという思いから、「鯖のみでここまで成長した」当社を誇りにして講演させていただいております。

●最後に社長にとっての「鯖」とはなんでしょうか。

鯖は私にとっての「ライバル」です。私は鯖の可能性が大きく広がる場面を眼前にしましたが、それと同時に私自身の可能性を鯖が広げてくれたと感じています。今後も鯖と対抗していくことが、自分自身の成長に繋がっていくものと信じています。

<取材後記>

最初は、つまらない仕事だと思えた仕事でも、取り組んでいるうちに、だんだんと興味が湧いてくることもある。幼いころから魚が嫌いで、食べることも、触ることも出来なかったという、右田社長。

高校卒業後、最初に就職したスーパーの鮮魚部門の仕事では、魚と格闘する苦難の日々が続いたそうである。

しかし、仕事(魚)と真剣に向き合ううちに、どんどん魚の魅力に引き込まれ、次第に、臭みもなく、美味しい鯖寿司を作りたいという気持ちに変わってきたという。

今を一生懸命に生き、何かを全力でやっている人には、普通の人が見えない道が見えてくるそうである。その時、彼には、「鯖街道」と呼ぶべき一本道が見えたのかも知れない。

鯖と共に歩むサバ(鯖)イバルロード、仕事と真剣に向き合わない「鯖を読む人間」には、決して見えない道である。

掲載している情報は、平成 25 年 7 月時点のものです。